

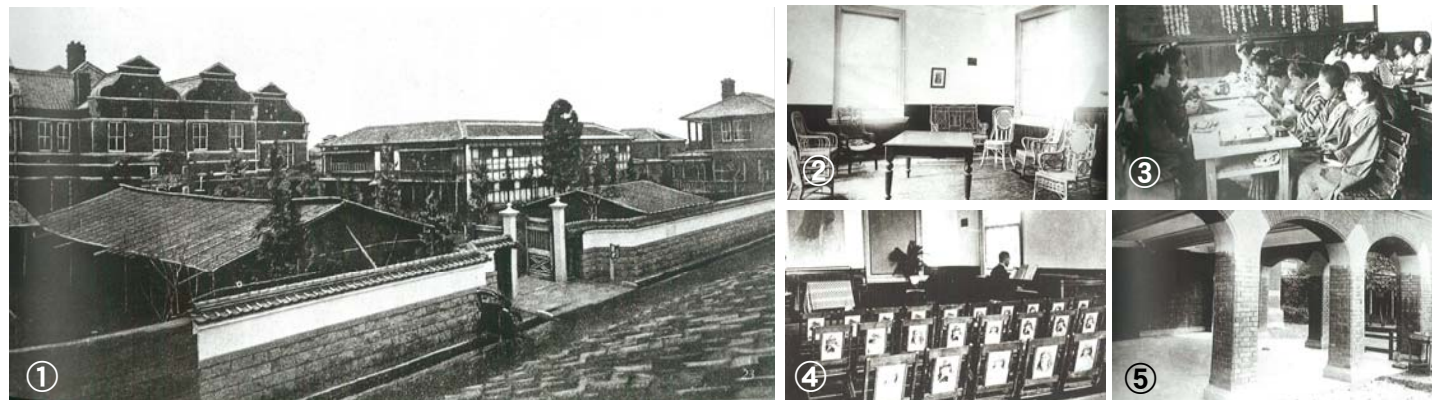
# 明治館とは

## 明治館の歴史

- 平安女学院の歴史は、1875年、大阪の川口居留地にアメリカ人女性宣教師エレン・ガードロード・エディが興した「エディの学校」から始まりました。その後「照暗女学校」への校名変更を経て1895年に京都に移転。現在の「平安女学院」という名称のもと、京都で初めての校舎として建設されたのが「明治館」です。
- 設計者は、名誉ある「英国王立建築家協会正会員」の資格を持つアレクサンダー・N・ハンセル氏です。建築様式は、19世紀のイギリスで大流行し学校の校舎建築に好んで使われた「アン女王様式」が採用されました。
- 「明治館」は建設当時「本学教場」と呼ばれ、教室、職員室、事務室など、学院の中心的な機能を担っていました。京都での開校1年後にはその近代的教育が評判になり、生徒数が急増しました。その後、現代に至るまで平安女学院の建学の精神やあゆみを示すシンボルとして、多くの人々に愛され親しまれてきました。
- この「明治館」も建設以来100余年を経て老朽化による傷みが激しくなり、1995年の阪神淡路大震災を契機として、立入禁止とせざるを得なくなりましたが、「明治館」の復興と永久保存を願う多くの人々の声を背景に、2003年には「保存委員会」が設立。2004年には国の登録有形文化財として登録されました。
- 多くの卒業生、同窓会、建築関係者の方々のご支援を受け、2005年度から本格的な保存改修工事が進められました。工事は、設計管理をNPO「文化財修復構造技術支援機構」に委託。約3億5千万円の工費と3年間の工期をかけて、2008年8月に工事が完了。ふたたびその美しい容姿を復活させました。

## 明治館の特徴 —クイーン・アン・スタイル—

- 「明治館」は、アン女王様式(クイーン・アン・スタイル)によってデザインされています。この様式の特徴としては—
  - ・煉瓦を露出して「上げ下げ窓」を付け、屋根をいろいろなデザインでにぎやかに飾っています。西洋建築は、基本的には石で作ることを理想とするため、レンガ造りの外側に石を貼って「石造り」のように見せかけることが一般的ですが、イギリスでは煉瓦をそのまま露出させることも多く、この様式もその典型といえます。
  - ・屋根は「ダッチゲブル」というオランダ式の曲線を持った「破風」(屋根の切妻にある合掌形の装飾板)で飾られており、またデザイン的にも様々な工夫が凝らされています。



①京都での開校時の学院全景 ②2階南側の部屋 ③生徒増のため食堂に入りきれない生徒は教室で弁当を食べた ④中2階の講堂 ⑤1階南西スペースは雨天体操場として使用された

- 名称:平安女学院 明治館
- 竣工:1895(明治28)年
- 設計者:アレクサンダー・N・ハンセル  
\*英国王立建築家協会正会員。  
明治期に神戸の居留地を中心に活躍し、国の重要文化財である神戸の「ハッサム邸」を設計したことで有名です。
- 構造:組積煉瓦造(イギリス積)2階建延床面積:約730㎡



2004年6月  
国の有形文化財として登録



# 有栖館とは

## 有栖館の歴史 —有栖川宮旧邸—

- 有栖川宮家は、1625(寛永2)年後陽成天皇の第7皇子 好仁親王によって創設され、1923(大正12)年、慰子親王妃の薨去によって絶家となるまで、ほぼ300年の系譜を持っています。その邸は当初京都御所建礼門の前に建てられていましたが、京都裁判所の仮庁舎等として使用された後、民有地であった現在の場所を買い上げて旧京都地方裁判所所長宿舎の一部として移築し、2007年まで使用されていました。
- 本学院は、京都御苑に隣接し文化的価値の高い有栖川宮旧邸を保存し、茶道、華道、香道、着付けの授業や市民講座の開催、観光センターの設置など国際観光学部としての取り組みとともに、他の学術・文化分野を代表する機関や組織と連携しながら京都文化と日本の伝統文化の研究・教育・発信を行う拠点として活用するため、2008年8月にこの施設を取得しました。

## 有栖館の特徴

- 「書院造り」の屋敷は、中庭を囲む「玄関棟」「住居棟」「客間棟」の3つの棟で構成。客間棟の西側には、「床の間」と「付書院」を備えた2畳の「上段の間」のある12畳半の座敷があります。この間に続く15畳の板張りの間は能舞台として使用でき、床下に音響効果を上げるために大きな獲(かめ)が埋められています。
- 烏丸通りに面した門は、銅板と真鍮板で葺かれた豪壮な趣を持つ平唐門で、三井一族の総長三井高保氏が1912年、邸宅の表門として新築。その後、別の場所に移築したものを裁判所が購入し、1952年に京都地方裁判所所長官舎表門として現在地に移築したものです。同年の仲秋の名月の夜、当時の所長石田寿氏と親交のあった歌人吉井勇氏が李白の詩から字をとってこの門を「青天門」と名づけたといわれます。この青天門は、左右の塀とともに大正期の門建築の作例として高い価値をもっています。
- 下立売通沿いの白い漆喰塗りの長屋門は、向って右手に居住の出来る部屋、左手に納屋等に利用されていたと思われる部屋を抱えています。築年月は不明ですが、専門家によれば、長屋門形式としては最上級の構えであり、築地塀とともに所長官舎屋敷の外見を構成する要素としても不可欠な建築であるといわれています。
- 庭内にある2本の大きなしだれ桜は、あたかも1本の樹のような枝振りを見せ、塀を越えて烏丸通にも大きく張り出し、春には美しい景観を見せてくれます。このしだれ桜は1952年3月、堂本印象画伯の発案により、醍醐三宝院内にあった実生(みしょう)の桜を当時の門跡岡田戒玉氏(調停委員)の快諾を得て分譲移植したもので、太閤秀吉が醍醐の宴をした当時の桜の孫にあたる樹であるといわれています。



①有栖館全景(右後方が京都御苑) ②青天門としだれ桜 ③「上段の間」のある座敷 ④「能舞台」にもなる板張りの間 ⑤長屋門

- 名称:平安女学院 有栖館
- 敷地面積:約2150㎡(約650坪)
- 建物:約392㎡(約119坪)
- 構造:木造瓦葺き平屋建て

**書院造り:**書院造りとは、室町時代から桃山時代にかけて完成した住宅建築様式の一つ。柱は角柱、畳を敷き詰め、襖(ふすま)、障子(しょうじ)などが用いられ、主室には、床の間、付書院、飾り棚が設けられています。内部はそれぞれの部屋に分かれ、接客空間が独立しているなどの様式を備えている。

**付書院:**(つけしょいん):床の間わきの縁側に張り出した棚で、下を地袋(地板に接して設けた小さい袋戸棚)などとし、前に明かり障子を立てたもの。

